

入院していても勉強なんて～市大分教室の取り組みから～

橘岡 正樹

Masaki Kitsuoka

佐藤 薫

Kaoru Sato

1. はじめに

～大阪府立光陽支援学校の概要について～

大阪府立光陽支援学校は大阪市旭区新森にあり、最寄駅は地下鉄清水駅で鶴見緑地公園の北側に位置する学校である。

肢体不自由部門と病弱部門からなり、肢体不自由部門は創立54年目、大阪市内で最も早く設置された肢体不自由児のための学校で、現在小学部・中学部・高等部からなる。病弱部門は小学部・中学部があり、平成21年大阪市立貝塚養護学校の閉校による機能移管で創設され、現在8年目となる。

2. 病弱部門の概要について

病弱部門は現在、大阪市立大学医学部附属病院と大阪市内総合医療センターの二つの分教室がある。また大阪市内の各病院（国立大阪医療センター、大阪赤十字病院、JCH0大阪病院、中野こども病院など）への訪問教育（基本的に週3回、1回2時間教えに行く）を行っており、大阪市内にある各病院に入院している子どもの支援を行っている。

3. 大阪市大分教室の概要について

大阪市大分教室は大阪市阿倍野区にある大阪市立大学医学部附属病院の8階にあり、教室が3部屋、入り口にトイレと倉庫、奥に職員室あり他の分教室と比べて恵まれた環境にある。

基本的には8階の分教室で学習を行うが、小児がんのために抗がん剤を投与していたり、体調がすぐれなかったり、投薬後の経過観察などのため8階の分教室に行くことができない子どもに対しては、17階のベッドサイドで学習をする。

昨年までの過去3年間の在籍は小学部34名、中学部17名であり年平均小学部で11名、中学部で6名となってい

る。疾病の内訳は小児がんで入院している子どもがほとんどで続いて腎疾患での入院となっている。



8階分教室（小学部教室）

4. 入院していても学習することの意義について

文部科学省（当時は文部省）は平成6年に「病気療養児の教育について」という通知を発出し、その中で「病気療養児の教育の意義」について以下の5点まとめている。この通知は、現在においても病気の子どもへの教育の意義を語る上で必ず出てくる文言なので以下に紹介する。

- ①教育の遅れの補完と学力の補償
- ②積極性・自主性・社会性の涵養
- ③心理的安定への寄与
- ④病気の自己管理能力の育成
- ⑤治療上の効果（入院中教育を受けるほうが、治療効果が高いと言われている）

市大分教室の重要な業務の一つである市大医学部看護学科に在籍している学生が、小児病棟で看護実習を受けるときに、私たち分教室教員が「分教室の取り組みについて」を講話しているが、学生に向けてはわかりやすく三点にその意義をまとめた。

- ①前籍校へ復学したときに困らないようにする。
 - ・退院後、勉強についていけるようにする。
- ②生活リズムをつける。

- ・朝は起きて勉強することで規則正しい生活を心がける。
- ③心理的な安定を図る。

- ・分教室で勉強ばかりするのではなく、創作活動や交流などで楽しい取り組みも行う。

というように、入院中であっても学ぶことが大切であることを折に触れて訴えている。

5. 入院から退院まで

- ①入院時： 入院した子どもの保護者には、病棟師長から「入院中でも分教室で学ぶことができる」ことを声かけしていただく。分教室で学ぶことを希望された保護者に対して、私たち教員が分教室での学習の概要を説明して学習をスタートさせる。突然の入院で戸惑いもある家庭も多いが、「楽しいこともたくさん行っていききたいので一緒に学んでいきませんか」と話をしている。転校の手続きについても保護者の負担にならないこと、学費は無料であることについても説明する。

- ②入院中： 入院中は毎日学習があるが、一人一人の子どもの体調については毎朝病棟から報告がある。学習については適宜前籍校（入院するまで通っていた学校）の担任と連絡を取り学習進捗の確認を行っている。テストや教材、プリントの提供を受けることで「クラスの子どもと一緒に勉強をしているのだ」という前籍校への所属感を忘れないようにする。前籍校からは励ましの手紙やビデオレターなどを、入院中の子どもにいただくこともある。

中学生については高校受験に関する評定をつける関係で、分教室で定期テストや実力テストを行い中学校の評定の参考にしている。また中学3年生については高校受験のための願書や自己申告書を作成することもある。

毎日の授業は国語や数学など机上の学習だけでなく、体育の時間に卓球やボール遊びをして楽しんだり、美術や家庭科、図画工作の時間に創作活動を行ったり、音楽の時間に一緒に演奏を行ったりするなど実技教科も精力的に行っている。

- ③退院時： 長期に入院しているこどもについては退院時カンファレンスを行う。前籍校の担任の先

生だけではなく、校長・教頭先生、養護教諭の先生、病棟からは主治医の先生、看護師の方々に来ていただき、復学時学校生活で配慮しなければならないことや行事の参加の可否などについて確認をしている。

具体的には、登下校（一人で歩いて登校できるか）、教室移動（エレベータなどを使用するか）、給食（夏場の弁当の持参について）、服薬（自分で薬を管理できるか）、各教科の学習（特に体育の見学などについて）、行事の参加の方法について（遠足や修学旅行、運動会など）、感染症が流行した時の対応について、など詳細に確認を行うようにしている。

基本的には退院と同時に転学の手続きを取り、学習した内容を前籍校に伝え学習空白ができるだけ生じないようにする。

6. 市大分教室の特色～「つなぎ支援」について～

市大分教室では、病気で入院中の子どもたちが孤独にさいなまれずに前籍校の子どもたちと関われるようにするために、インターネットを使って様々な活動を行っている。

①前籍校の子どもと入院中のこどもたちが一緒に学ぶ授業

昨年取り組んだものとして、インターネットのテレビ電話機能を使って、前籍校の授業で入院中の子どもが調べたことを発表した。前籍校の子どもは「学校にある防火設備と救急設備について」調べたことを発表し、入院中の子どもは「病院にある防火設備と救急設備について」発表した。これまでも前籍校とは「つないで」きたが、「見るだけ」「聞くだけ」になりがちであった。今回は双方向で学ぶことができる先進的な事例となった。

②遠隔授業の取り組み

退院後すぐに登校できない子どもは多い。特に中学生については学習の遅れを心配する家庭が多いので、退院後すぐに登校できない子どもについてはテレビ会議システム「Video Office」を使って遠隔授業を行い、自宅に授業を届けた。

このシステムの特徴はお互いの顔を見ながら同じ資料や問題などのファイルを画面共有できるところにあり、教科書やプリントを写真に撮り簡単にアップすることができる。また2か所なら無料で利用できるのも、有効活用できた。

昨年は二人の中学生に遠隔授業を行ったが、二人ともよく頑張り1年後の成績も順当で保護者からも感謝されている。

大学病院は全国から入院があり、全国どこにいても授業を届けることができる取り組みである。

③病院どうしをつなぐ交流

毎年病弱部門では、インターネットのテレビ電話機能を使って入院している子どもどうしをつないで交流会を実施している。

一昨年は「名まえビンゴ」というひらがなで行うビンゴゲームを実施した。分教室や訪問学級、それぞれの個室など9か所をつなぎ、パソコンの画面から「よっしゃー」という声が聞こえてきたり、順位を気にしたりして盛り上がった。昨年は小学部と中学部に分かれて英語のゲームを行った。各病院をつないで英語のゲームを通して学習を行った。

7. 新しい取り組み ～ロボットの導入～

市大分教室では新しい取り組みとして、様々なロボットを導入した。いくつかを紹介したい。

①セラピーロボット「パロ」

介護施設では多くの導入例のある介護ロボットである。かわいいアザラシのロボットで「クーン」と鳴きしゃべったり動いたりすることはしないが、それだけにペットのような癒しを与えるものである。

分教室に導入すると子どもたちは「パロのおうちを作ろう」と言っておうちやエサを自主的に作り始めた。「分教室に来るとパロに会える」という子どもたちの励みとなった。



セラピーロボット「パロ」

②ロビジュニア

おもちゃとして廉価で売られているロボットである。「今日は何日?」「何時何分?」と声をかけるとかわいい

声で答えてくれるロボットである。音声での反応が的確ではないがひょうきんなことを言うコミカルで楽しいロボットである。



ロビジュニア

③ドローン

昨年は医学部の庭で「退院おめでとう」と書いた垂れ幕をつけてドローンを飛ばした。

航空法の改正で分教室のドローンが飛ばせなくなったので、今年は室内用の軽量ドローンを飛ばしている。子どもにはとても人気で、ドローン飛行を楽しみに分教室での学習を頑張っている子どもたちもいるくらいである。

8. おわりに ～病弱教育の課題について～

私たちが考える病弱教育を行う上での課題は以下のとおりである。

①集団の確保

どうしても分教室の学習は少人数や個別での対応が主になっており、集団の中で学ぶ機会がない。

②学習の機会

抗がん剤治療で、入院→一時退院→入院→一時退院を繰り返す子どもにとっては、つらい治療が終わると自宅療養になるので、学習する時間が少なくなる。

③高校生への支援

大阪府では府立高校に在籍している生徒について在籍校の教員が週三回病院に出向き授業を行う、長期入院生徒学習支援事業があるが、ほとんどの都道府県では院内学級や分教室は中学生までである。高校生の学習についてはボランティアが支援しているのが実情である。

特色ある取り組みを進めると課題もたくさん見えてくるが、今後も市大分教室として病気の子どもの教育的ニーズにあった支援を行っていければと考えている。